

みめぐみの

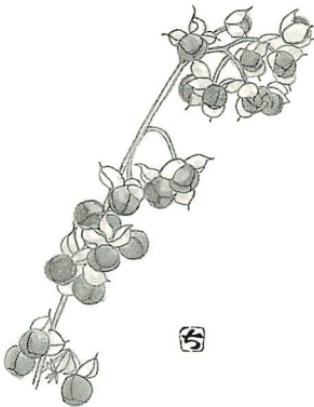
第49部



禮呈

みめぐみの

第49部



四

大谷光道著

目次

阿弥陀様と本願（十四）	2
お月見	10
「地獄が怖い」	10
月愛三昧	14
「喜んで地獄に」	15
こんなにも可愛がられていたのか	19
慈と悲	20
愛と慈悲	22
親鸞聖人は	23
月が愛する	24
読者の頁	27
寺務所だより	29
あとがき	31

阿弥陀様と本願（十四）

今回は第四十一願からで、いよいよ最後の第四十八願までとなります。この第四十一願から第四十八願の中で、第四十六願以外の七願は、阿弥陀様の国（極楽）ではなく、他の国で自力修行し成仏を目指す菩薩たちのための願です。

第十七願のお蔭で、我々は南無阿弥陀仏を称えることによつて阿弥陀様の極楽に往生できることになったわけですが、それは阿弥陀様が「凡夫を往生・成仏させるという至難な業を成し遂げて、それを他の諸仏がたが褒め讃えるだろう」と誓つてくださつてゐるからです（『第三十六部』）。

そして阿弥陀様は、ご自分の国にとどまらず、他の国の菩薩にも修行をしやすくし、覚りへの成果が上げられるように、これらの願をも誓われました。この七つの願にはみな「聞我名字」——わが名字（名号）を聞いて——とありますように、「私（阿弥陀様）の名を聞くだけで……としてあげよう」と誓われています。それでこれらは、第十七願の別益、つまり第十七願の「付録の利益」と呼ばれています。

第四十一部 設我得仏、他方國土、諸菩薩衆、聞我名字、至于得仏、諸根
闕陋、不具足者、不取正覺

私が成仏するとき、他の国の菩薩たちが私の名（六字の名号）
を聞いたならば、（修行するにあたって）仏に成るまでの間、身
体が完全であるようにしてやりましょう。もしそうでなければ、
私は覚ったとは言いません。

（諸根具足の願）

第四十二願

設我得仏、他方國土、諸菩薩衆、聞我名字、皆悉逮得、清淨解脱三昧、住是三昧、一發意頃、供養無量、不可思議、諸仏世尊、而不失定意、若不爾者、不取正覺

私が成仏するとき、他の国の菩薩たちは、私の名（六字の名号）を聞いて、皆清浄解脱三昧を得るでしょう。そして、ひとたび思いを起こせば、数限りない諸仏を供養し、定意（三昧の心、禪定の心）を失わないでしょう。もしそうでないなら、私は覚つたとは言いません。

清淨解脱三昧＝煩惱の束縛を離れた清らかな三昧の境地

第四十三願
設我得仏、他方國土、諸菩薩衆、聞我名字、壽終之後、生尊貴家、若不爾者、不取正覺

私が成仏するとき、他の国の菩薩たちが私の名（六字の名号）

を聞いて、そのまま命終わつたら、世の中で尊ばれている家に生まれさせましよう。もしそうでないなら、私は覺つたとは言いません。

（生尊貴家の願）

第四十四願

設我得仏、他方國土、諸菩薩衆、聞我名字、歡喜踊躍、修菩薩行、具足德本、若不爾者、不取正覺

私が成仏するとき、他の国の菩薩たちが私の名（六字の名号）を聞いたなら、躍り上るほどに喜んで菩薩の修行に励み、多くの功德を身に具えるでしょう。もしそうでなければ、私は覺つたとは言いません。

（具足徳本の願）

第四十五願

設我得仏、他方國土、諸菩薩衆、聞我名字、皆悉逮得、普等

三昧、住是三昧、至于成仏、常見無量、不可思議、一切諸仏、
若不爾者、不取正覺

私が成仏するとき、他の国の菩薩たちが私の名（六字の名号）を聞いたなら、皆、普等三昧を得るでしょう。仏になるまでの間、常に数限りない一切の諸仏を見奉るでしょう。もしそうでなければ、私は覺つたとは言いません。

（住定見仏の願）

普等三昧＝無量の諸仏を一度にあまねく拝見することのできる禅定

第四十六願

設我得仏、國中菩薩、隨其志願、所欲聞法、自然得聞、若不爾者、不取正覺

私が成仏するとき、私の国の菩薩は、聞きたいと思う説法を自然に聞くことができるでしょう。もしそうでなければ、私は覺つたとは言いません。

（随意聞法の願）

第四十七願

設我得仏、他方國土、諸菩薩衆、聞我名字、不即得至、不退

転者、不取正覺

私が成仏するとき、他の国の菩薩たちが私の名（六字の名号）を聞いて、直ちに不退転の位に至ることができないならば、私は覚つたとは言いません。

（得不退転の願）

第四十八願

設我得仏、他方國土、諸菩薩衆、聞我名字、不即得至、第一

第二第三法忍、於諸仮法、不能即得、不退転者、不取正覺

私が成仏するとき、他の国の菩薩たちが、私の名（六字の名号）を聞いたなら、直ちに第一、第二、第三法忍の位に至ることができるのでしよう。諸仮の覺られる真理を得た上は、直ちに不退転の身になるでしよう。もしそれができるなら、私は覚つたとは言いません。

（得二法忍の願）

第一、第二、第三法忍॥

- (一) 音響忍・教説を聞いて覚ること 音=仏・菩薩の声
- (二) 柔順忍・真理にすなおにしたがつて覚ること
- (三) 無生法忍・不生不滅的道理を覚ること

『第二十九部』から始めたこの「阿弥陀様と本願」のシリーズも、今回でようやく最後の第四十八願までを終わることができました。

途中で、極楽のありさまや極楽の住人の生活など「極楽は素晴らしいところなんだから、当然そうなのだろう」とは思うものの、その実感が湧かず、「はー、ふーん、……」というところがずいぶんあつたものと思います。

このシリーズのはじめのほうで私は、

阿弥陀様の本願・四十八願には、阿弥陀様はどんな仏様か、阿弥陀様の作られた極楽という国土はどんなところなのか、そこに住んでいる人はどんな人たちなのか、そしてそこではどんな生活が営まれているのか、そして何よりも「どうしたらそこに行けるのか」という私たちにとつて

もつとも関心の深いこと、その他極楽の全てが述べられています……

(『第三十部』)

と述べました。

何と言つても「どうしたらそこに行けるのか」ということが私たちにとつてもつとも関心の深い事柄です。「とにかく、行かないと始まらない」、もつと平たく言うと「行つてなんぼ」ということですね。これを煎じ詰めると、第十七願から第二十願ということになり、さらに煎じ詰めると、第十八願ということになります。

しかし、一方、四十八願全体を見るからこそ第十八願の大切さがわかるとも言えます。まあ、そんなことから長いシリーズになりましたが、阿弥陀様の四十八願の旅もここで幕といたしましょう。

お月見

お月見と言えば「月を眺め樂しむ集い」で、私たちがお月さまを大切に思つて、愛する、愛でるという心持の表れでしょう。今日はその逆さまで、「実は、お月さまが私たちを愛してくれているのだ」というお話をしようかと思います。

「地獄が怖い……」

お釈迦様のころ、今から二千五百年前、インドで栄えていたいくつかの



国の中にマガダ国という大国がありました。これはそこでのお話です。マガダ国はインドの北東部、今で言うとバングラデシュの西、ネパールの南、ガンジス川の中流くらいにあたります。この国の首都は王舍城（ラージヤグリハ）と言い、そこに頻婆娑羅（ビンビサーラ）王という国王の居城がありました。韋提希（いだいけ）（ヴァイデーヒー）というお妃との間に阿闍世（あじゃせ）（アジャータシヤトル）という王子がいました。

阿闍世は、たいへん乱暴で強欲な、だれの手にも負えない王子でした。ある日、友達の提婆達多（だいばだつた）（デーヴアダッタ）にそそのかされて、早く自分が王位に就きたいと思うようになり、父である頻婆娑羅王を座敷牢に閉じ込めてしまいます。家来たちには、王のところへは食べ物はおろか何も運ぶなど命じます。つまり飢え死にさせようと、幽閉してしまうのです。

それを見かねた母・韋提希は、酥蜜（そみつ）（牛乳を精製して蜂蜜を加えたもの）を小麦粉でこねたものを洗い清めた身体に塗り、首飾りの穴に葡萄の汁をた

め込んで、そして何も持たないような顔をして王様のところへ通つたのです。

王様は、葡萄の汁を飲み麦を食べて元気を保つていました。

このことを王子は牢獄の番人から聞き、「母は敵である」と、怒り狂つて母を殺そうとします。家来たちは命がけでこれを止め、阿闍世は殺すことは断念するのですが、今度は母も幽閉してしまいます。

やがて頻婆娑羅王は死に、阿闍世が国王になります。ところが、身体全体に出来物ができて、臭い匂いがあたりじゅうに広がるほどひどい病気になり、父を殺してしまったことをたいへん後悔し苦にするようになります。そして、何よりも「こんなことをしたから、きっとわしは地獄に墮ちる」と、地獄に墮ちるのが怖くて、居ても立つてもいられない毎日を過ごします。家来たちも、「王様、あなたが悪いんじやありません。そんなに気になさらなくともいいです」と慰めるのですが、身も心も穏やかにはなりません。

徳も高く、名医であり、お釈迦様に帰依している耆婆（ぎば）（ジーバカ）という

人が、是非ともお釈迦様に会うようになると勧め、阿闍世をお釈迦様のところへ連れて行きます。

お釈迦様は、阿闍世を見るや静かに瞑想され、何とも言い表すことができない不思議な光を発せられました。この光が阿闍世の身体に当たつて、出来物はたちどころに治つてしまい、あたりに広がつていた悪臭もいつぺんに消えてしまつたのです。それは、まるで月の光に包まれているような光でした。このときお釈迦様は、仏様だ



清交社のお月見の会で法話

けがお入りになることのできる「月愛三昧」^{がつあいさんまい}という境地においてになり、それでこの不思議な光が発せられたのです。月の光が私たちを包んで愛してくれる、それにたとえられるような光が発せられる境地なので「月愛三昧」と言うのです。

月愛三昧

月の光は、青い蓮華（蓮の花）をいつせいに開かせます。これと同じように、月愛三昧にお入りになつた仏様の光によつて、私たちは仏法の話を聞く心境になります。

また、月の光は旅人の行き先を照らして旅人を安心させ喜ばせるというはたらきがあります。これと同じように、修行をしている人たちが、仏様の光によつて先々に明るいものが見えて喜びを生じます。

このように、月の光が私たちを照らし愛してくれているように、仏様のお

慈悲が光となつて伝わつてくるので、月愛三昧と言うのです。

今私は、「仏様の光によつて、私たちは仏法の話を聞く心境になります」と述べました。実際にお経（『涅槃經』）には「仏様の光によつて善心をおこす」と書いてあるのですが、「善心」ではわかりにくいので、このように言ったのです。「善心」とは、善い心ですが、「善い心」とは何を指すのでしょうか。私たちは、どちらかというと仏法の話から遠ざかろう、遠ざかろうとしているのではないでしようか。このような心が「悪心」です。このような私たちにも仏法の話を聞かせるようにはたらきかける、月愛三昧の光はそういう光なのです。

「喜んで地獄に……」

阿闍世の身体の厄介な出来物は治つたので、次は心の病です。

お釈迦様は阿闍世が心を開くようにいろいろと角度を変えて説き聞かせ、

また問答をなさいます。その中に、
次のようなお釈迦様のお言葉があ
ります。

「あなたの父上である頻婆娑羅
王は徳が高く、常に、私をも含め
て諸仏を供養する（仏法を大切に
する）という、まことに善い行い
を重ねられ、王位に就くことがで
きたのである。諸仏がもしその供
養を受けられなかつたら（うわべ
だけの供養で、眞実の心がなかつ
たら）、父上も王位に就けなかつ
たことだろう。もし王位に就けな
したことだろう。



お月見コンサート「月に寄せて」

かつたなら、そなもその位を奪おうと父を殺すようなこともなかつただろう。もしさなが父を殺して罪があるといならば、諸仏にも罪があることになるだろう」

お釈迦様は、阿闍世のすべてを受け入れ、このように因縁の連鎖を説きながら、とことん阿闍世に寄り添われたのです。静かに阿闍世のそばにいて、「最後まで君の味方だよ」と仰つたのです。このことが、阿闍世の苦しみを軽くし、やがてその苦しみを抜き去つてくださつたのです。

そして、「君が悪いといなら、私も罪人になることになるよ」とまで言われて、深く感じ入つた阿闍世は、なんと、次のように言い出したのです。

「伊蘭いらんの種から伊蘭の毒樹せんだんが生えます。梅檀めんだんの種から梅檀の樹が生えたのを見たことはあります、伊蘭の種から梅檀の樹が生えるのを、いま初めて見ました。伊蘭の種とは私のこと、梅檀というのは、私の心に起こつた無根むこんの信を言うのです。煩惱に悩まされている多くの人々が、煩惱から抜け出し

て善い心を起こすようになるのであれば、私は地獄に行つて何万年もそこで苦しむことになつても、それは苦ではありません」と。

あれほどまでに地獄に墮ちるのが怖いと言つていた阿闍世王が、ここまで豹変したのです。

伊蘭＝紅く美しい花をつけるが強い悪臭があり、食べると発狂して死ぬと言われる。

栴檀＝栴檀と対照したり、煩惱にたとえられる。

栴檀＝芳香を放つ香木。芽を吹くと伊蘭林の悪臭がなくなるという。

ここで、「無根の信」つまり「根がないのに生まれた信心」とは、どういうことだと思われますか。

「煩惱にまみれた凡夫が、阿弥陀様の本願によつて信心をいただき、念佛の生活をするようになる」というのが、浄土真宗の教えです。言い換えると、「自分は煩惱の塊で、自分の中には磨けば光る玉、仏になる種は持ち合せていない」と、このことが本当に心に深く刻まれるときが信心をいただくときで、このとき、阿弥陀様の光明に包まれ、念佛を称える身となるのです。

阿闍世はまさにこのことをお釈迦様に吐露したのです。

こんなにも可愛がられていたのか

申し落としましたが、実は、阿闍世が父王を殺し、身体中に出来物ができ悪臭を放つようになったとき、韋提希は、あらゆる薬を塗るなど、一生懸命に看病してやりました。このとき阿闍世の様態は一層悪くなり、出来物も悪臭もひどくなりました。

また、耆婆がお釈迦様のところに行くことを勧めたとき、はじめ阿闍世は躊躇していたのですが、空中から亡き父の声がして、「お前は父を殺すという大罪を犯したのだ。お釈迦様のほかに救ってくださる方はいない。すぐに行け」と強く後押しされたのです。このときも阿闍世の出来物とその臭いは急にひどくなりました。

もともと父母を憎んでいた阿闍世ですが、この二つの出来事で、自分が父

からも母からもすこぶる大切にされていたことに気づいたのです。それで阿闍世は、「……は父のせいだ」「……は母のせいだ」という言い訳を失い、まつたく逃げ道をなくすことになってしまったことが、自分のすべてを受け入れる覚悟となつて、阿闍世の廻心えしんの原動力の大きな一つになつたのではないかと思われます。

慈と悲

日常でも慈悲という言葉はよく使います。慈悲とは「慈」と「悲」を合わせた言葉です。他人に利益や安樂を与える（与樂よらく）、いくくしみのことを「慈」と言い、他人の苦に同情しこれを抜き去ろうとする（抜苦ばっく）、思いやりのことを「悲」と言います。「慈」を父の愛に、「悲」を母の愛にたとえることもありますね。仏様が私たち衆生にかけてくださる思いで、仏教では特に大切な言葉です。

仏様が、衆生が身に苦を受けてい
ると察知されたとき「悲」の心が起
こり、ご自分がこれら衆生を解脱さ
せよう（煩惱から解放されて自由な
心境を得させる。覚らせる）と思わ
れたとき「慈」の心が起ころと言わ
れます。

阿闍世に「最後まで君の味方だよ」
と仰つたのが「悲」で、阿闍世に「煩
惱に悩まされている多くの人々のた
めに自分が地獄で苦しんでもいい」
と言わせたのは、お釈迦様の「慈」
のお心によるものです。



愛と慈悲

ここで、愛と慈悲について、混同されやすいので、はつきりさせておきましょう。

仏教では基本的には「愛は悪いこと」と考えます。「愛」は、貪欲（むさぼり）や執着を意味する言葉で、満足してもさらに次をほしがる激しい欲望、盲目的な執念を指します。人間は、気に入つたものは強く求め、気に入らないものを憎しみ避けようとします。また、今まで気に入っていたはずのものでも、何かのきっかけで逆転し憎悪と変わります。

このようなまったく自分本位の気まぐれな「愛憎」に対して、他人に対する隔てのない、つまり、わが子に対する親の愛が純粹であるように、一切衆生にわが子に対すると同じ愛情をそそぐ、仏・菩薩のような愛情を「慈悲」と言います。

そして、「愛語」（慈悲の心をもつて人に話しかけること）、「慈愛」（いくくしみ愛すること）、「愛敬相」（仏・菩薩の優しく溫和な相貌）など、仏・菩薩について言う言葉での「愛」は、「慈悲」の意味を持つています。これは、一切衆生を仏道に導きたいという、仏・菩薩の「こだわり、執着」と考えればいいわけで、要は、煩惱の衆生と仏・菩薩とでは執着のレベルがかけ離れているということです。

月愛三昧もこれと同じで、一切衆生を愛してくださる仏様のお入りになる三昧なので、この名があるのであります。

親鸞聖人は

『涅槃經』に、仏法に帰依させることの極めて難しい人々を三通り挙げ——謗法（大乗の教えを謗る者）、五逆罪を犯した者、闡提（仏になる能力や素質を持っていない者）——その実例としてこの阿闍世のお話が説かれて

います。私共の開祖・親鸞聖人は、その主著である『教行信証（信の巻）』に、この部分を引いて、「月愛三昧」を深く讃えておられます。

また、浄土真宗の教えの根本となる三つのお経（『浄土三部経』）の一つである『觀無量寿經』（略して『觀經』）というお経には、息子・阿闍世のために苦しむ韋提希が、お釈迦様のお導きで念佛の信心をいただくことが説かれています。親鸞聖人は『教行信証』の冒頭にこの王舎城の悲劇を取り上げ、念佛によつて救われなければならないのは、まさに謗法、五逆、闡提などの悪人である旨を示されています。「悪人正機」といえばよくご存知と思いましょうきやくすが、実は、悪人こそ念佛の教えの正客（主賓）なのです。

月が愛する

お月見と言つても、私たちが月を愛でる（愛月）のではなく、月のほうが我々を愛でてくれている（月愛）ということもあるのだと、ご紹介いたしま

した。

今日は三好莞山氏げんざんの尺八もお相伴で聴かせていただけるとのことで、わくわくしながら期待しております。

月を愛したり月に愛されたりして、どうかごゆっくりお月見をお楽しみください。

今日はありがとうございました。



本願寺から望む月

《編集部註》

去る九月十八日、本願寺において、清交社のお月見の会が催され、光道台下の法話、三好荒山氏の尺八演奏が行われました。本稿は、その時のお話に加筆していただいたものです。

なお、九月二十二日には、大谷楽苑ほかの演奏でお月見コンサートが開かれました（末尾参照）。

清交社（本部）は、社員（会員）間の親睦と知識の向上をはかるために設立された、伝統と歴史のある社交クラブです。大正十二年に創立され、清新、自由で大らかな社風のもと、良き先輩・良き仲間とともに地域社会との交流を深めるなど、親しみのある開かれたクラブであることが特徴です（清交社のHPより）。光道台下も社員の一人。

質疑応答

富山県南砺市 河合 寛さん

問 正信偈の速入寂靜無為樂ということを読むと、いろは歌の有為の奥山という言葉を思い出します。この無為と有為の意味解釈が、はつきりと知りたいのです。
よろしくお願ひします。

南無阿弥陀仏 合掌

答

有為とは、「さまざまの因縁（原因と条件）」によつて生じ、常に生滅し永続しないすべての物事・現象（『大辞林』）」ということで、我々の住んでいる世界です。「こうした諸現象・諸存在を「無常」「無我」と理解するのが仏教の立場（『岩波仏教辞典』より）です。「無常」を「常」と思い、「無我」を「我」とこだわるところから、私たち

の苦しみ、争い、……が始まるのです。

これに対し、「無為」は、「因果関係に支配される世界を超えて、絶対に生滅変化することのないもの。すなわち、涅槃・真如ねはん しんにょといつた仏教の絶対的真理のこと（『大辞林』）」です。

以上は、国語辞典に示された内容ですが、このようなお答えでよかつたのでしょうか？



三回目のお月見コンサート

「月に寄せて」開催！

——九月二十二日——

大勢の観客を迎えて、嵯峨の夜空に「荒城の月」など、懐かしい歌声が響きわたりました。

フルート、クラリネット、テノールと大谷楽苑の共演に、飛び入りの尺八も加わり、アンコールでは「みめぐみの」「サンタルチア」の全員合唱となりました。



「皇室と本願寺」展（仮称）を開催

来年度の「闡如會」（平成二十六年四月十日より十三日）に併せて「皇室と本願寺展」（同年四月三日より十三日）を開催致します。

今年春には「大谷智子展」を開催し、遠近より多数の皆様にお出かけいたしましたが、来年は大谷家に伝わる宝物の中より天皇の御宸筆ごしんひつを中心に御下賜品や御遺物など、天皇家と本願寺の親密なつながりを今に伝える品々を展示公開致します。

内容については現在検討中ですが、鎌倉時代の龜山天皇、南北朝時代最後の後小松天皇を始めとして、近世に至るまで、時代を超えてご覧いただけます。大部分が初公開となります。

お楽しみに！

あとがき

みめぐみの刊行委員会

今年は例年以上に台風が日本列島を襲っています。被害に遭われた皆様には衷心よりお見舞い申し上げます。

御親教集『みめぐみの』は平成九年から年三回発刊を積み重ね、この第4十九部で通算五十号を迎えました。読者の皆様のお支えに感謝致しております。勿論、光道台下のたゆまぬご執筆の賜であり、禮子裏方も毎回表紙絵をお書き下さいました。立場を変え一読者として、ここに深く御礼申し上げます。有り難うございました。今後もひきつづきご執筆をよろしくお願ひ致します。

いよいよ、「阿弥陀様と本願」は完結し、次のシリーズも楽しみです。後編の「お月見」の最後に、「悪人正機」：悪人こそ念佛の教えの正客」と、分かり易く締めくられています。私達も月を眺める時、自らも月の光に照らされているという実感を大切にしましよう。

バックナンバー、追加注文の頒布価格、送料は次の通りです。
『みめぐみの』 1冊の価格は200円（税込）です。

○1冊～4冊 = 送料及び振替手数料（70円）はご負担下さい

※送料 1冊=120円、2冊=160円、3冊=180円、4冊=210円

○5冊～9冊 = 送料は実費、振替手数料は不要です

※送料 5～6冊=210円、7～9冊=290円

○10冊以上 = 送料・振替手数料共に不要です

以上の要領で申し込みを受け付けます。折り込みハガキにご住所、氏名、電話番号をご記入下さい。ハガキに切手は不要です（ご住所には郵便番号をお忘れなく）。

みめぐみの 第49部

2013年11月5日 印刷

定価 200円

2013年11月10日 発行

著 者 大 谷 光 道

発 行 みめぐみの刊行委員会

〒616-8432

京都市右京区嵯峨鳥居本北代町21

本願寺寺務所内

TEL.075(882)6262 FAX.075(882)6220

振替口座 01060-5-56990

印 刷 (株) 中 外 日 報 社

